

魏志倭人伝などの間違い、疑問点を考察する

尾道市 河野俊章

目次

序

- I、魏志倭人伝の間違いなど
- II、「陸行一月」の問題
- III、魏志倭人伝などが示す邪馬台国の位置、特徴を示す内容など14項目
- IV、私の邪馬台国

序

周知のように邪馬台国の所在を巡ってはすでに無数の研究者による数百年の研究にもかかわらず、いまだ発見されない。

約1800年の大昔の話とは言え、大国が存在していたのだ。それがまだ見つからないとは？これは魏志に間違いがあるのかもしれない。

「そんなことをしたらどんな論でも成立する。とんでもない。」とハナから否定する声もある。しかし、魏志に間違いがあるのならば、間違った地図を頼りに目的地へ行こうとしているようなもので、到達できるはずがないのである。

現状を鑑みると「魏志倭人伝のどこかに間違いがあるのではないか」と考えるのも、必要な邪馬台国研究分野である、と思う。

以下「魏志倭人伝の間違い」について、拙い私論を述べるが、もちろん衆知を集めて納得のゆく論が出来れば申し分ないと思う。

間違いとする基本線は下記である。

- 1、邪馬台国の位置に関するものに限定する。
- 2、我々が知らない旅行記の間違いを見つけるのは困難であろう。疑問と思う所（よくわからない所）に注目する。
- 3、当時の事情からして「容認出来る誤差」「決まり切った大ざっぱな表現」は除外する。

なお、論は読みやすくするために、なるべく短く簡潔にすることも目標とした。詳しい説明や論拠などは主として私のHPへのリンクとした。必要に応じてご覧ください。

I、魏志倭人伝の間違いなど

1、「(奴国から) 東行至不彌国百里」

不彌国では船に乗るのだ。当然海岸のはずだが、東行では陸地になる。

2、「(投馬国から) 南至邪馬台国女王之所都水行十日陸行一月」

当時は長期にわたる陸行は非常に困難、不可能に近かったはずだ。それが陸行一月とは？

3、「計其道里当在会稽東冶之東」(邪馬台国への道理を計ってみると現在の紹興や福建省の東になる。)

更にわかりやすく言えば、台湾の東になる。これは大変な間違いだが、それでも「容認できる誤誤差」か「間違い」か、見解の相違が出るかも。

予想していたよりも間違いや疑問点は少ない。古代の旅行記にしては総じて「良くできている」と言う評価をしたい。万人が分からないと思うのは「陸行一月」の部分のみである。

1, 3の疑問点はさておきここでは「陸行一月」に注目する。

II、「陸行一月」の問題

これは古来より問題視されてきた箇所であるが、私もこれは**完全な間違い**と断定する。詳しくはHPでご覧いただきたい。

ここでは簡単に間違いとする根拠を箇条書きで書いておく。

- 1、 当時の旅行事情を考えれば、片道一か月、往復二か月の陸行は不可能と言えるような困難な旅である。その困難な旅のことが一言も書いてない。
- 2、 ここまで旅行記の原則、つまり目的地への距離(所要日数)、方向が書かれているのにここで突然その記録が途絶える。
- 3、 「水行十日」まではともかく現在の地図上で迎れるが、「陸行一月」では行方不明である。

それでは「正しくはどうなのか」という問題が生じるが、本の複製はすべて写本であった事情を考えれば「日」の下が少し伸びて「月」と誤写した可能性が考えられる(これは私がどこかで読んだ話だ)。

「陸行一日」ならば、考え方によって異なる場所になるかも知れないがともかく、誰にでも地図上で迎れる。

幸いにして邪馬台国の位置、特徴を示す項目はかなりある。それらの項目を候補地にあてはめれば、邪馬台国は発見できるかも知れない。

Ⅲ、魏誌及び中国正史が邪馬台国の位置、特徴を示す、あるいは暗示している 14 項目の総整理。

- 不彌国（奴国の少し東）までは衆目の一致するところなので、ここではふれない。
- 邪馬台国の比定が出来たらこれらの項目と対比する。
- 全部一致することはまずないであろう。もちろん魏志などが誤っていることも予想される。また当時と現在、ほぼ 1800 年という時代の差もある。考古学が間違っているかも知れない。せっかく列挙した項目が間違っているかも知れない。
- 違う場合には、単に「正、誤」と断定するのではなく、予想でもその相違の原因を挙げてみる。
- これは全ての邪馬台国論がなすべき必須作業と考える。
- 各項目は現代文で書いているが、根拠となった原文は下に囲みでしめた。

- (1) 不彌国（福岡のすこし東）からみて遙か南方に邪馬台国がある。
- (2) 不彌国から南へ水行二十日の所に投馬（ツマ）国がある。
- (3) その投馬国から更に南へ水行十日で着いた所（邪馬台国の港）から、更に陸行一日の所に卑弥呼が住んでいる都がある。
- (4) 邪馬台国は海に接している。
- (5) 行程から考えるとこの国は、中国の東冶（今の福建省）の東にある。（注＝分かりやすく言えば、それは台湾の東あたりになる。つまり北回帰線、熱帯地方と温帯地方の境界になる）
- (6) 山には丹がある。
- (7) 真珠青玉が出る。
- (8) 邪馬台国は伊都国の南にある。（原文は「邪馬台国は北に伊都国を置き諸国を治める」）
- (9) 気候温暖、冬でも野菜が出来る。

(10) 径150m程度の卑弥呼の墓(候補)がある。

当時の中国の短い長さの単位は「歩」であった。これは日本の一步とは違って、左右両足の歩幅である。つまり日本流の二歩である。古来この「一步」は、145cmとされている。「径百余歩」とはもちろんあまり正確な測量値ではないが、150m~160mぐらいの見当であろう。

(11) 邪馬台国は古くから朝貢をしている(歴史が長い)。また、立派な墓を造る文化を持っていた。故に邪馬台国歴代の墓(古墳群)が現存する可能性大。

(12) 女王国から東へ海を千余里行った所に国があり倭人が住んでいる。

(13) 大和朝廷を造ったのは魏志が書いている邪馬台国の者たちである。別の表現をすれば「邪馬台国は天皇国のふるさと」である。(この項は隋書、北史)邪馬台国の比定地には天皇国であった遺跡などがある可能性は大である。

(14) 九州説ならば後の奈良への引っ越しは絶対条件である。論の科学性を尊重する人からは「伝説」は嫌われるに決まっているが、「国の引っ越し」と言えば誰もが「神武東征」伝説を思う。その出発地が邪馬台国である。それは古事記などにはっきり書いてある。(異論はあろうが候補の一項目として挙げておく) **出航地伝説**

上記の判断の根拠となった原文を示す。

○は私のワープロにない文字である

- (1) は (2) (3) の総合判断
- (2) (不彌国から) 南至投馬国水行二十日
- (3) (投馬国から) 南至邪馬台国女王之所都水行十日陸行一日
- (4) 今倭水人好○没捕魚蛤
- (5) 計其道里当在会稽東治之東
- (6) 以朱丹塗其体如中国用粉也 其山丹有
- (7) 出真珠青玉 (青玉が何かは不明)
- (8) 自女王国以北特置一大卒 常治伊都国
- (9) 倭地温暖冬夏食生菜
- (10) 卑弥呼以死大作塚径百余步殉葬者奴婢百余人
- (11) 自古以来其使詣中国皆自称太夫
- (12) 女王国東渡海千余里又有国皆倭種
- (13) 都於邪摩堆則魏志所謂邪馬台者也 (隋書、北史)
- (14) 古事記 (中卷) 日本書紀 (卷第三)

{補論}

(13) の記録は考えてみると意外な結果が予想されることがありそうだ。つまり「邪馬台国」と言う名は魏の使者が記録したものだが、日本語ではそれはすべて「天皇国 (天皇が支配していた国)」と置き換えられる。

例えば「邪馬台国九州説では後に邪馬台国の奈良への引っ越しがあったはずだ」という論旨は、「魏の使者が240年ごろ九州にあった天皇国を訪問したのであれば、後にその天皇国は奈良へ引っ越したはずだ」と言い換えが出来る。

このように単に言い換えただけで、「天皇国が九州にあった」「奈良へ引っ越した」という予想は、まさに古事記などが書いている内容と完全一致し、突如「邪馬台国は日向ではないか」という雰囲気が生じる。

ついでに東征の時期は正確には言えないが、266年に朝献の記録があり、この時にはまだ邪馬台国は九州にあったことになるので、東征の時期は266年以降という予想も出来る。

IV、私の邪馬台国論の要点

場所

投馬（ツマ）国＝現西都市

邪馬台国＝肝属平野から鹿屋市にわたる大隅半島を横断する一帯、昔はここも「日向国」であった。

歴史

1世紀から中国古史に記録される。240年ごろ魏志の使者が来て、その後まもなく「奈良へ国の引っ越し」という大事業を行う（神武東征）。古代の高名大国は、その後宿敵「狗奴国」に支配された可能性はあるが、現在に至るまでの2000年近い長期に亘りごく普通の田園風景であった。

「私の邪馬台国」はあちこちで公表していますが、前回この欄で発表した「邪馬台国へ至る二つの道」が読みやすいと思います。読んで頂ければ幸いです。